

宇野千代

私は夢を
見るのが上手

中公文庫



中公文庫

わたし ゆめ み じょうず
私は夢を見るのが上手

定価はカバーに表示してあります。

1996年9月3日印刷

1996年9月18日発行

著者 うのちよ
宇野千代

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA, INC.

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202686-5 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

私は夢を見るのが上手

宇野千代



中央公論社

目次

随筆

ごく自然に

欲望の整理

淡墨の桜とともに

人生とは、行動すること

最初の記憶

私の中の「ふるさと」

錦帯橋

二

五

九

三

六

元

三

「おはん」と私

二〇九

恋愛の武士道

二三

折々のごあいさつ

三三

菊池寛賞受賞

女流作家十三人展に

東郷青児十三回忌

中村チエコさんに

山田詠美さんに

佐々木幹郎さんに

三宅一生さんに

「宇野千代展」で

（瀬戸内寂聴さん、中村メイコさん、

中山仁さん、山本陽子さん、宮尾登美子

さん、森本毅郎さん） 岩国の皆さんに

中央公論百年記念のお祝ひ

五十年前

の婦人公論愛読者大会で

那須の仕事場

三六

雲煙の彼方へ

四〇

尾崎士郎さんの故郷

五二

魂が家の中で休んでゐる

五五

私は夢を見るのが上手

六六

楽しい好きなことだけを

七五

心願かける心

八〇

気に入った笑顔

九六

「生きて行く私」について

一〇二

テレビと私

一〇四

私の机

一〇六

私は夢を見るのが上手

対 談（瀬戸内寂聴氏）

おとこと文学と

一四

身上相談 その人の思ひ方次第

一五

こんな身上相談をしてほしかった

一六

宇野先生への手紙

藤江淳子

一七

随 筆

ごく自然に

私は大分耳が遠い。きこえにくくなつたのは八十歳を過ぎたころであつたらうか。はじめの頃はとても不自由を感じた。あるとき人から、「昔から耳の遠い人は長生きをすると言はれてゐるんですよ。先生はやはり長生きの系統なんですね、」と言はれた。その言葉を私は慰めとは受け取らなかつた。

さうだ、その通りだと思つたものである。「まあ、さうですか。それはよいことを聞きました。私は、百歳までも、百二十五歳までも長生きをしますよ。」と言つたものであつた。

人間九十五年も生きてゐれば、かならずどこかは、くたびれてくるはずである。

私の田舎に、古い自転車を自分で直し直し、二十年近くも乗つてゐる人がある。新しい自転車を買つて上げようと思つても、もつたいたいと言つてことはるのである。それがその人にとつては自慢なのである。私の体も同じやうなことも知れない。

私には書く仕事がある。書く仕事に耳の聞こえないことは決定的なマイナスではない、と自分では思ふことにしてゐる。少しくらゐ聞こえなくとも、今、現在、私は、かうして書いてゐる。何を気にすることがあらうか。さう自分に言ひきかせてゐるうちに、いつか、それも自然な状態になつた。きこえないことが日常になつたのである。

補聴器をつけるやうになつたのは、ここ六、七年のことである。はじめは雑音が気になつて、すぐに外しては、うちのものたちに迷惑をかけたものであつた。今は慣れたといふより、そんなことはいつてゐられなくなつたのである。人間はどんなことでも、慣れれば平気になれるものなのである。

ところで、最近、私は、この耳の聞こえなくなつたおかげで、面白いことを発見

したのである。

ある日のことであつた。仲良しの知人が来た。映像の仕事をしてゐるために、世界を駆け廻つてゐる。私とは孫ほども年がちがふのであらうか。二、三日前にアフリカから帰つたばかりであるといふ。

「象と暮らしてゐる女性に会つて来たんですよ。その人は象の言葉が分るんです。」と彼は言つた。

「まあ、象の言葉が分るんですか、その人に是非会ひたいものですね。」

私は思はず身を乗り出した。

彼の言葉がごく自然に聞きとれたのである。ごく普通に会話が成立したのであつた。深い安らぎが体中にしみわたるやうであつた。

「まあ、先生、Tさんのお声はよくきこえるんですね。きつと音の波長が合ふんですね。」

そばにいたうちのものが、びつくりして言つた。言はれて、私も改めて自分が、

ごく普通に話をしてゐることに気づいた。

この話を中国の気功を勉強してゐると言ふ人に話した。その人はかう言つて謎を
といてくれた。

「気が引き合ふんですよ。気の合ふ人の声は、心をいつぱいに開いて受け入れるの
です。先生は、その方が好きではありませんか。」

「ええ、だいたい、大好きですよ。」

私の声が明るく弾んでゐたのが、自分でもわかつた。

よい気はよい気と呼ぶ、悪い気は悪い気と呼ぶのである。私はこれから、よい
気と呼び合つて生きて行きたいものである。

ところで、うちのものたちが、ベランダに雀のゑさをおいたら、毎朝とんで来て、
ゑさを催促するやうになつた。その雀のしぐさがとてもかはい。都会の真中に暮
らしてゐると、こんなささいなこともうれしくなるものである。

欲望の整理

年を取ると欲がなくなると言ふが、それはほんたうであらうか。私は、この秋に九十五歳を迎へるのであるが、この説は、どうも、ほんたうには思へないのである。欲望がなくなるのではない。質が変化するのである。若い時には、雑多に我と我が身を占めてゐた欲望が整理されるのである。単純化されるのである。

あの、灼けつくやうな欲望は今はない。激しい渴望も去つた。いつて見れば、生きが悪くなつたのである。

しかし、私は、今のこの自分が好きである。私にとって、今あるこの場所、この時が私の人生なのである。少し、生きは悪くなつたが、私には、毎日することがた